

第5節 高校2年生

国際理解と平和 ～ぬーやいびーが？自ら問いかけて考える沖縄～

石 川 久 美・佐 光 美 穂
川 合 勇 治・鈴 木 善 晴
佐 藤 愛 子・高 松 逸 朗

【抄録】 高校2年生の総合人間科では、「国際理解と平和」という大きなテーマのもとで、グループ研究を行った。11月に実施した沖縄での研究旅行においては、各グループが決めた訪問先で聞き取り調査を行うことで研究を深めた。地上戦が起きた現地に立って過去の戦争について学ぶのみでなく、基地問題、環境問題など沖縄について多方面から学ぶことによって、「国際理解と平和」について考える取り組みを行った。

【キーワード】 国際理解 平和 沖縄戦 基地問題 フィールドワーク グループ研究

1. テーマ

国際理解と平和

～ぬーやいびーが？自ら問いかけて考える沖縄～
(ぬーやいびーがは沖縄の方言で「これは何？」を意味する)

2. 学年目標、ねらい、伸ばしたい力など

・学年目標、ねらい

沖縄の歴史と現状を調べることによって、「国際理解と平和」という大きなテーマに対する問題意識を育て、探究学習を行う。学年で協同探究することによって、知識、理解を深め、それぞれが考えた課題に対して、自分たちに何ができるのかを考える。

・伸ばしたい力

- ・現在の問題を認識し、その原因を探っていく力
- ・現在の諸問題の関係性を認識し、整理・分析する力
- ・グループで協力して課題を設定し、その課題を解決する力

3. 活動内容

- ・沖縄のブレ研究を通じて沖縄について、基本的な知識を身につける。
- ・自分たちのテーマを選び、フィールドワーク（FW）を行い、今の沖縄における「国際理解」「平和」とは何であるかを考える。
- ・集録執筆・発表を通じて、自分たちの研究をまとめ、かつ他のグループとの研究・体験の共有をはかる

4. 評価方法

- ・教員による評価（ワークシートへの記入・提出、FW等への取り組み、集録）

- ・生徒自身による自己評価（アンケート、発表や一年間の振り返り）
- ・生徒間の相互評価（ディスカッション、グループ作業、発表）

5. 系統性

(1)前年度とのつながり

- ・前年度とのつながり
高校1年生は、個人研究でテーマの追究方法を学んだ。2年生では、昨年身に付けたテーマの追究方法を生かして、グループ研究を行う。また、クラス、学年で協同探究を行う。

(2)「持続可能な開発のための教育（ESD）」との関わり

沖縄の諸問題（本州とは異なる沖縄の歴史的・戦争の問題・米軍基地問題・自然破壊問題など）は、現在の国際社会が抱える問題の縮図と言える。沖縄の問題を自分たちにつながる問題と認識し、その解決策を探ろうとする今年度の学習はESDという点でも意義のあることだと思われる。

6. SGHとの関連

すべての生徒が個人・グループで行う課題研究である。単なる調べ学習とは異なり、現代的課題に対しての疑問点・問題点から研究を開始する。疑問点・問題点に対する自分の見解（仮説）に基づき、課題解決に至るための研究計画書を策定し研究を進める。その過程でフィールドワークを行い、自分の研究課題に詳しい専門家から意見を聞くなどの取り組みを行う。研究集録は、仮説および動機・結論・検証方法・検証したことの順でまとめる。

7. 授業計画

(前期)

回	日	授業内容(予定)
1	4月11日	オリエンテーション・沖縄の歴史 「平和とは何か」を考える・ダイヤモンド ドラッキング ー戦争をなくすための9つの方法ー
2	4月16日	ダイヤモンドドラッキングの発着各班の 発表・研究旅行説明
3	4月17日	プレ研究① データから考える沖縄
4	5月1日	プレ研究②
5	5月15日	プレ研究発表①
6	5月29日	プレ研究発表②
7	6月12日	映画「GAMAー月桃の花ー」
8	6月26日	沖縄FWのグループおよびテーマ決定
9	7月10日	糸数壕のできごとを学ぶ 特別講師 中村桂子さん
10	9月11日	FW先決定・交渉開始

(後期)

11	10月16日	FW質問内容の検討・FW先依頼文 発送
12	10月30日	FW行程の確認・事前学習中間報告 会
13	11月6日	FW質問内容の確認
14	11月 11日～14日	沖縄研究旅行
15	1月15日	研究集録執筆
16	1月29日	研究集録原稿完成・研究成果報告会 準備
17	2月12日	研究成果報告会
18	3月5日	研究成果報告会
19	3月12日	小論文「平和とは何か・平和を実現 するために必要なことは何か」

8. 事前学習

(1)データから考える沖縄

グループごとに1)～5)の資料を配付し、6)の

①～⑧の手順で事前学習を行った。

1) 普天間基地

①朝日新聞 ②読売新聞

2) 労働力状態・人口・就業・失業率・財政・基地借 地料

①総務省統計局 国勢調査 労働力状態、男女別
15歳以上人口の推移(全国)

②総務省統計局 国勢調査 労働力状態、男女別
15歳以上人口の推移(沖縄)

③平成25年 沖縄県勢要覧 みえる・わかる・お
きなわ 人口・就業

④総務省統計局 労働力調査参考資料 2013年 都
道府県別結果

3) 人口・就業・賃金・労働時間・所得・家計

①平成25年 沖縄県勢要覧 みえる・わかる・お

きなわ 人口・就業

②平成25年 沖縄県勢要覧 みえる・わかる・お

きなわ 賃金・労働時間・所得・家計

4) 進学率、就職率

①文部科学省 都道府県別不登校生徒数

②沖縄県統計局 学校基本調査 進学率及び就職率

5) 外国人就業者数

①総務省統計局 国勢調査 国籍別外国人就業者
数及び割合(全国)

②総務省統計局 国勢調査 国籍別外国人就業者
数及び割合(沖縄)

③④沖縄県 企画部統計課 外国人登録者国籍別
推移、市別の状況

⑤愛知県庁 愛知県内の外国人登録者の状況

6)

①データと資料から分かる沖縄の特徴を見つける。

②①のような特徴が表れる原因は何であるかという
仮説を立てる。

③②の仮説が正しいかどうかを確かめるにはどのよ
うなデータや資料が必要であることを考える。

④データや資料集めの分担を決める。

⑤データや資料を持ちよって、②の仮説が正しいか
どうかを検証する。

⑥①～⑤をまとめて発表する。

⑦発表内容についての意見交換

⑧プレ研究からわかったことをまとめる。

生徒の感想には「データの正確性について考え、デー
タを正確だと言うためには、母集団についての説明・比
較の際の単位変換が必要であり、目的に適したデータを
示すことが必要であることが分かった。」と書いてあっ
た。データの意味を考え、データの分析の方法、分析し
た結果の伝え方を身につける機会となった。他グループ
の発表に対して批判的に質問する体験ともなった。

(2)映画「GAMAー月桃の花ー」の鑑賞

沖縄研究旅行でお話を伺う、安里要江さんが書かれた
手記を元に作られた映画である。「日が経つにつれ、だ
んだんと周りの人たちが悲痛の中死んでいき、特に主人
公の息子が亡くなったシーンでのショックは忘れられな
い。映画は普通ハッピーエンドのものが多く、実際の
沖縄戦ではハッピーエンドなんてありえない現実を知っ
た。」という感想にあるように、一人の女性の沖縄戦で
の体験を描いた映像を見ることによって沖縄戦が実際
にどのような様子であったかを考える助けとなった。

(3)糸数壕のできごとを学ぶ

糸数壕で生き残った日本兵の娘である中村桂子さんの
お話を聞いた。(2)の映画では、壕に避難する住民を日本

兵が追い出す場面がある。このように、日本兵が住民の被害を増大させたという捉え方もあるため、元日本兵による証言は少ない。さらに高齢化によって、直接お話を聞くことは困難である。直接ではないが、次の生徒の感想にあるように、後の世代に伝えなければならないという父の強い意志を引き継いだ娘さんであるからこそ、伝わったこともあると思われる。

「今まで平和学習をしてきて、“戦争を風化させてはいけない。後世に伝えなければ。”というワードをよく耳にしていたが、私は体験者でなければ伝わらないのではないかと思っていた。しかし、中村さんの言葉は私にとってもひびき、伝えたいと思う心次第で変わるんだなあと、私自身も後世に伝えなければと思った。」

9. 沖縄研究旅行

最初に各自が研究テーマを考え、内容が近い者が集まってグループを作った。それぞれの研究テーマについて

ての下調べを行い、自分たちでフィールドワーク先を決めた。

(1)研究旅行行程

- ◎1日目 11月11日(火)
中部国際空港—那覇空港＝糸数壕＝首里城＝
＝夕食後 平和講話(安里さん)
- ◎2日目 11月12日(水)
北中城＝嘉数高地＝
＝平和祈念公園(韓国人慰霊の塔・平和の礎・資料館)＝
＝ひめゆりの塔＝魂魄の塔＝ホテル・北中城
- ◎3日目 11月13日(木)
北中城＝＜終日 班別フィールドワーク＞＝
＝ホテル・恩納村 夕食後エイサー体験
- ◎4日目 11月14日(金)
恩納村＝万座毛＝国際通り(昼食)＝
＝那覇空港—中部国際空港

(2)各グループの研究テーマおよびフィールドワーク先一覧

A組

	研究テーマ	フィールドワーク先	
1	陸と海から見た沖縄	ORIC	ネイチャートレイル
2	戦時中の医療	南風原町立南風文化センター	旧海軍司令部壕
3	文化と政治の関連性	沖縄県立博物館	ゴザゲート通り
4	基地問題	サンエーV21はんだがわ食品館	沖縄社会大衆党
5	色々な視点から見た米軍基地	沖縄国際大学 経済学部	普天間基地・基地政策部
6	アメリカが沖縄の文化に与えた影響 ～食文化を中心に考える～	むら咲村	沖縄国際大学

B組

1	異なる視点から見た米軍基地	海上自衛隊沖縄基地隊	普天間高校
2	Sightseeing & Economy-NUYAIBIGA-	琉球大学 観光産業科学部	リザンシーパークホテル 谷茶ベイ
3	安全保障と国防	陸上自衛隊 那覇基地	KADENA
4	教育～昔と今と未来～	沖縄大学 人文学部 こども文化学科	読谷高校
5	心の傷とアフターケア	元沖縄県立看護大学教授	養秀開館
6	沖縄の生活環境から平和についてもう一度考える	沖縄市役所・戦後資料文化資料 展示室 ヒストリート	商店街 一番街

C組

1	平和教育	うるま市立勝連小学校	うるま市勝連庁舎 教育委員会
2	基地の現状	宜野湾市基地政策部 基地渉外課	興南高等学校
3	沖縄の産業からみた復興	名桜大学 国際学群	バイナップルパーク
4	沖縄戦に関わった人々の気持ち	沖縄タイムス	陸上自衛隊 那覇市
5	海	琉球大学	美ら海水族館
6	沖縄の文化	沖縄県立博物館	琉球村

「高校生の方に基地問題についてインタビューを行った。フィールドワーク前は基地反対派が多いだろうと考えたが、実際は基地にそれほど否定的でない人もおり、驚いた。その理由は、基地で働く親をもつ友人がいるから、基地がなくなると友達が困る、など基地が身近でない私たちからは予想もできない理由であった。インタビュー中に航空機が学校のそばを通り、班員全員が話を止めてしまうほどの大きな騒音であったが、高校生の方たちが気にすることなく話を続けたことから、私たちにとって非日常のことが当たり前になっていることに気づいた。」という感想にあるように、現地に行って話を聞くことによって知識のみでなく、感覚としても得る部分があった。

10. 事後学習

各グループが研究した内容を研究集録としてまとめた。また、それを元にしてクラス発表会を行い、投票で選んだ各クラスの代表による学年発表会を行った。発表の準備は、フィールドワークで学んだことを整理する機会となっただけでなく、新たに生じた疑問点をさらに研究する機会となった。他のグループの発表を聞くことで、多くのことが関連していること、多様な考えがあることを学ぶことができた。

11. 成果と課題

今年度は、初の取り組みとして、8の(1)に書いたように、沖縄に関するデータを分析することから事前学習を始めた。何となく調べるのではなく、具体的なデータをじっくりと見て、それを分析する経験はその後の調べ学習に有益だったと思われる。調べる場合には、データ自体の信憑性を考える必要があり、多様な意見を集めるべきであることを体験的に学んだ。

次の文章は、最後の授業で生徒が書いた小論文の一部である。

「あなたにとっての平和とは何ですか。自分の定義を書いてください」という項目に対して、「人々が健全に学び、争い、友を作ることで成長する機会がだれにでも与えられる社会」「戦争や紛争などによって自分は死んでしまうのではないか、などという不安な気持ちを抱く人が一人もいない世界」という身近なところから定義する生徒もいた。また、「考える単位によって異なる。その単位、その各々が幸せであり、かつその幸せが多いことが平和に近いと言える。個人単位で考える平和と国際単位（国どうし）で考える平和は一緒にはならない。」といったように、独自の考え方を入れて書いた生徒もいた。いずれにしても、生徒一人ひとりが、自分の言葉で表現しており、一年を通してずっと考え続けていた様子が伺えた。

また、一年の活動を通して考えたことの欄には、以下のような文章があった。

「班としての“考え方”は当時の僕には未経験でまだ学習不足という感じだった。その状況に対し、ひけをとり、あるいは甘んじていたのかも知れない。だが、その状況に対する情けなさからもっと知らなくてはならないという今までノータッチだった部分に対しての学習意欲が出てきた。僕はこれを一年の中での一番の収穫としたい。」という生徒もいた。グループ学習であったからこそ問題意識が芽生えた例である。

次の二人のように、「戦争の悲惨さを学び戦争をしてはいけなくと結論づける」だけでなく、「なぜ戦争が起こり、どうしたら戦争を防げるのかを学ぶ必要がある」という意味の文章を書いた生徒が多かった。

「“心の傷とアフターケア”について学んだ。心の傷というものは一人ひとり違うため、その体験や心情に同情することしかできないと初めは思っていたが、ある程度共通する傾向があることが今回のフィールドワークを通して分かった。体験や資料を得た上でただ同情し、“戦争は二度と起こしてはいけなく”という感情を持つだけでは、何の解決にもならないので、今回学んだアフターケアなどの具体的な行動について知り、それを他の人に伝えたり、できることは自ら行動することが一番重要だと思った。」

「最初の授業では平和について漠然とした考え方しかしていなかったので、軍勢力や外国との関係から物事を見られなかった。しかし、フィールドワークや研究集録のまとめ、研究発表などを通して、今まで教えられてきたような戦争の悲惨さを伝えるだけでなく、一人ひとりが争いの残酷さを理解した上で、どのようにして戦争に至ったか歴史・政治的な面から学んでいく必要があると感じた。グループのテーマの基地問題と同じように、人にはそれぞれの考え方があって、数字ではまとめられないと実感した。賛成・反対のわかりやすい意見から簡単にものごとをまとめて、他方の意見は無視するといったやり方ではなく、そもそも根本的な問題とは何かを見失わず、いろいろな角度から物事を見て、別の解決策を出すことも必要ではないかと考えた。」

単に、沖縄戦や沖縄の基地問題、環境問題を知るだけでなく、生徒それぞれが問いと仮説を立て、それを確かめるために調べ、自分が考えた仮説が正しいかどうかを考えることによって、主体的に深く学ぶことができる。「国際理解と平和」という大きくて重たいテーマは一年で考えが完結する課題ではない。この一年で学んだ多様なアプローチの方法と主体的な学びによって育てた問題意識を基盤として、今後それぞれの考えをさらに広げ、深めていってくれることを期待している。

(文責 石川久美)